手指骨に発生した Osteoid osteoma の 1 症例

山口赤十字病院整形外科

岩田 信彦・福岡 善平

北田 懐仁

A Case of Osteoid Osteoma in Ossa Digitorum Manus

by

N. Iwata, Y. Fukuoka and K. Kitada

Orthopaedic Surgery, Red Cross Hospital of Yamaguchi

Osteoid osteoma often outbreaks in tibia or femur. But, this disease in ossa digitorum manus has been rarely reported in Japan.

We found a man aged twenty-four with osteoid osteoma in the fourth phalanx proximalis. X-ray examination showed a nidus there and it showed a annular sequestrum.

This time, we have reported this case and have given consideration to the clinical and pathological finding of this disease.

はじめに

従来、骨の特殊な炎症性疾患として論じられていたものを、1935年 Jaffe が osteoid と atypical bone よりなる良性骨形成腫瘍として、Osteoid osteoma と命名した。以来、多くの報告がなされているが好発部位は大腿骨・脛骨とされ、手指骨に発生するものは稀である。最近我々は、環指基節骨に発生した Osteoid osteoma の1例を経験したので、若干の文献的考察を加えて紹介する。

症 例

患者：25才の男性

主訴：左環指 PIP関節痛

家族歴：類似疾患なし。

既往歴：左手指の外傷の既応はない。

現病歴：2年前より誘因なく、左環指 PIP 関節付近に時々疼痛があり、2カ月前より次第に腫脹が強くなり、夜間痛も出現するようになった。近医を受診し、当科を紹介された。

初診時所見；体格中等度、奇形、色素沈着などの異常所見はみられなかった。局所所見では、左環指 PIP 関節から基節骨にかけて腫脹・圧痛・軽度の発赤があ

り、PIP 関節の可動域は伸展 -18° 、屈曲 60° と制限がみられた。

血液化学所見では異常は認められなかった(表1)。

レ線写真では、左環指基節骨に直径7mmのradio lucent area がみられ、辺縁はclearで周囲に硬化像がみられる。又、Nidus中央に3mmの大きさの円形像がみられ Annular sequestrum 像を呈している(図1)。左右像では、掌側に骨肥厚硬化像がみられる(図2)。断層撮影では、単純レ線と同様に Nidus 中央に腐骨様の像が見られた。

手術所見：左環指のdorsalより進入し、PIP関節

表1 血液生化学所見

RBC	504万
WBC	5100
Seg.	49%
Stab.	5%
Lymph.	42%
Mono.	3%
Eos.	1%
Alk. Phos.	6.8KAU
LDH	170 U
LAP	178 U
CRP	(一)
ESR	5mm(1時間値)・14mm(2時間値)

図1 単純レ線 前後像

図2 単純レ線 側面像

付近の基節骨を露呈させ、エアトムにて開窓した。骨皮質は硬化して厚く、内部には腐骨様のものがあつた。腐骨様部を含み、周囲を十分搔爬、摘出した。膿汁などは認められなかった。摘出物は、黄白色の軽石状であつた。一般細菌、結核菌の染色、培養を行ったが、いずれも陰性であつた。

病理所見：Nidus 周囲には骨の反応性増殖が みる

図3 病理組織像

れ、内部では Osteoid の形成、血管に富んだ造骨性結合組織、比較的広い骨梁形成がみられる。又、いくつかの giant cell がみられるが、異型細胞は認められない (図3)。

以上の事より、Osteoid osteoma と診断した。術後 10 カ月の現在、疼痛なく、再発の徴候は認められていない。

考 案

1935 年 Jaffe が Osteoid osteoma と命名して以来多くの報告があるが、本邦では 1964 年から 1974 年までに全国腫瘍患者登録一覧表で 160 例、山崎らによると 1977 年までの文献的報告は 77 例と少い。

図4 本邦における手の Osteoid Osteoma の症例 (計 9 例)

発生年齢は、20代・30代に多く、発生部位は大 腿 骨・脛骨・脊椎に多く発生し、60%近くを占める。

一方、本邦において手指骨に発生した Osteoid osteoma は、渡辺らによると1980年までに報告された症例は、図4のように中手骨2例、基節骨4例、中節骨1例、末節骨2例の合計9例にすぎず、稀なものと思われる。我々の症例は、基節骨としては5例目、手指骨としては10例目の症例と考える。

なお、欧米では手根骨に発生した症例も報告されており、手のほとんどの部位で発生すると考えられる。

結 語

今回、我々は環指基節骨に発生した Osteoid osteoma を経験し、稀な症例であると考えたのでここに報告した。

参 考 文 献

- 1) Freiburger, R. H. et al.: Am. J. Roent-

genol. Radium Ther. Med 82, 194, 1959.

- 2) Ghiam, G. F. et al.: J. Hand Surg. 3, 280, 1977.
- 3) Jackson, R. P.: Clin. Orthop. 128, 303, 1977.
- 4) Jaffe, H. L.: Arch. Surg. 31, 709, 1935.
- 5) Sherman, M. S.: J. Bone Joint Surg 29, 918, 1971.
- 6) Sullivan, M.: Hand 3, 175, 1971.
- 7) 山崎安郎ほか: 整形外科, 30, 11, 1979.
- 8) 渡辺耕志ほか: 整形外科, 31, 906, 1980.

質問

熊本大学 北川 敏夫

病変は骨髓内にあったのか、骨皮質内にあったのか、いずれですか。

回答

山口日赤 岩田 信彦

※ 腫瘍の位置に関する質問

答: 腫瘍は、皮質内のものであった。